

## 漢代任俠論ノート(二)

東 晋 次

### はじめに

昨年度の本紀要に公表した「漢代任俠論ノート(一)」(以下「前稿」と称する)においては、前漢代の官僚の任俠的性格を明らかにするため、漢初から武帝期までの任俠の心性をもった官僚の行動等について論じた。その中で、任俠の心性を有する中央官僚や地方有力者(地方官や郡県吏および産業者や商人)などを含む「諸公」なる階層ないしグループの存在を摘出し得たが、諸公については、戦国期に遡ると同時に、前漢後半期におけるそのあり方などを確認することが課題として残されている。また、諸公グループに属すると目される「富人」がどのような社会的存在であったかについては、彼らが当時の産業や商業と密接に関わった人々であったことはすでに指摘されており、商業に従事する商人や彼らが活動する場としての「市」の実態などについても相当な研究の蓄積がある。しかし商業や市と任俠者の活動との関わりについてはなお明らかにしなければならぬ問題が数多く存する。これらについてはいずれ考えることにしたいが、前稿において提起した問題、漢代官僚の任俠的性格の、武帝期までのそれについては不十分ながらすでに触れ得たけれども、それ以降については課題として残されたままである。従って、本稿においては、武帝期より後の前漢官僚の任俠的性格や官僚世界と任俠的世界との交通に関して、『漢書』をもとにいちおう整理しておきたいと思う。

### I 前漢後半期の任俠的風氣

#### 1 宣帝の任俠性

まず『漢書』巻八宣帝紀の冒頭に記された宣帝の少年期から青年期にかけての生活に関する叙述に注目したい。

後、詔あり、掖庭に養視せしめ、属籍を宗正に上らしむ。時に掖庭令の張賀嘗って戾太子に事え、旧恩を思顧し、曾孫を哀れみて奉養はなはだ勤たり。私錢を以て供給し、書を教え、既に壯となるや、爲に暴室衛氏の許広漢の女を取る。曾孫(宣帝)は因りて(許)廣漢兄弟及び祖母の家の史氏に依倚し、詩を東海の馮中翁より受け、高材にして好學たり。然れども亦た游俠を喜び、闘鷄走馬し、具さに閭里の姦邪、吏治の得失を知る。数しば諸陵を上下し、三輔を周徧す。常て連勺の函中に困しみ、尤も杜鄠の間に樂しみ、率むね常に下杜に在り。時に朝請に会しては、長安の尚冠里に舍す。

戾太子の子孫であった皇曾孫つまり後の宣帝が、戾太子の巫蠱事件によって郡邸獄に収監されていた。病に陥った武帝が望氣者の、長安獄中に天子の氣がある、との言によって、長安中の収獄者を全員殺害するよう命令を発し、追究が郡邸獄にまで及んだが、廷尉監の邴吉によって危うく難を逃れ、その後の大赦令によって、邴吉は宣帝を戾太子の後であった史良娣の家に送り届けたのである。その後宗室の一員とし

て属籍に付され、暴室畜夫の許広漢の娘を娶るが、そのころの宣帝の生活について述べたのが右の一文である。

征和二年（前九一）七月に生起した巫蠱事件以降の宣帝の養育については、卷七四邴吉伝や卷九七上外戚伝の衛太子史良娣の条に関連の記事がある。それらによると、巫蠱事件の生起の際にはわずか生後数ヶ月であったが、治獄使者の邴吉が郡邸の女囚に乳養せしめ、後元二年（前八七）に武帝の使者の追及を振り払ってのち、まもなく大赦令が出て郡邸獄から解放されることになる。五年間の幽閉であった。「宣帝紀」では、大赦令の後、邴吉が祖母の史良娣の家に送り届け、そこで養育させたようである。史良娣の家で生活を送りながら、宗室の一員として、養育費の給与を受けていたのであり、またかつて宣帝の祖父（戾太子）に仕えたことのある宦官（應劭注による）張賀のご恩報じの好意によって、順調に生育したわけである。宣帝が、邴吉の霍光への奏記によって、宮中に迎えられるのは、昌邑王賀が霍光によって廃された元平元年（前七四）七月、宣帝が十八歳の時であるから、上記史料の任俠的生活を送ったのは、十代の半ばから後半にわたる。当時の語で言えば、宣帝は「少年」であったことになる。

宣帝が任俠者仲間と交際していたことについてはこれ以外にも証拠がある。『漢書』卷九二游俠伝の陳遵の条に、

陳遵、字は孟公、杜陵の人なり。祖父の遂、字は長子、宣帝の微なる時、与に故あり。相い随いて博奔し、数しば進を負う。宣帝の即位するに及び、遂を用い、稍や遷りて太原太守に至る。迺遂に璽書を賜いて曰く、太原太守に制詔すらく、官は尊く禄は厚ければ、以て博の進を償うべきなり。（遂の）妻の君寧、時に旁に在りて状を知れり、と。遂、是において辞謝し、因りて曰く、事は元平元年の赦令の前に

在り、と。其の厚くせられること此の如し。元帝の時、遂を徴して京兆尹と爲し、廷尉に至る。

とあるのがそれである。宣帝は元平元年七月に皇帝位に即き、九月に大赦令を発しているが（「宣帝紀」）、ここに言う元平元年の赦令とはこれ指しているのであろう。宣帝もなかなかくだけた人物だったようである。宗室の属籍を有しながら博徒仲間と博奔に興じ、皇帝即位後もかつての交際仲間との私的な関係を面白がっていたのである。皇帝や京兆尹・廷尉にまで至った者に、このような少年ないし博徒の出身者がいたというところに、漢代中期社会における任俠的風気の充満を感じざるを得ない。

さらに、『漢書』卷九七上孝宣王皇后伝に、

（皇后の父）奉光は少き時、鬪鷄を好む。宣帝の民間に在るや、数しば奉光と会して相い識る。

とあり、この王奉光なる人物は、「其の先は高祖の時に功あり、爵関内侯を賜わる。沛より長陵に徙り、爵を伝えて后の父の奉光に至る」（王皇后伝）とあるように、関内侯の爵位を有していたのである。宣帝はこの王奉光と任俠的生活の中で知り合ったということである。宣帝即位の後、奉光の娘は後宮に入って捷仔に進み、霍皇后が廃された後に皇后に冊立されたのである。宣帝が王奉光の娘を後宮に入れ、後には皇后に冊立したのは、王奉光との交友関係からくる情誼によるとも考えられよう。ともあれ、宣帝の前漢王朝の中興者としての統治方針の一斑が、若い頃の下情に通じる経験に由来していることは言うまでもないであろう。

さて、いまひとつ「宣帝紀」の叙述で興味深い事柄がある。それは、「数しば諸陵を上下し、三輔を周徧す。常て蓮勺の函中に困しみ、尤も杜鄴の間に樂しみ、率むね常に下杜に在り」とある内の、「常て蓮勺の

鹵中に困しみ」である。ここに述べられている事態はどのように解すればよいのであろうか。顔師古の注は次のようになってゐる。

如淳曰く、人の困辱する所と爲るなり。蓮勺県に塩池あり。縦廣は十余里。其の郷人は名づけて鹵中と爲す。：師古曰く、如説は是なり。鹵とは鹹地なり。今は櫟陽県の東に在り。其の郷人は此の中を謂いて鹵塩池と爲すなり。

この注を見て疑問なのは、如淳が言う「人の困辱する所と爲るなり」である。蓮勺県近辺に塩池が有つて塩の生産が行われていたことは、唐代においても煮塩が行われている事実からも確かであろう<sup>3)</sup>。しかし、その塩池における塩の生産と、宣帝が人に困辱されたことがどのようなつながるか、よく判らないのである。前稿でも触れた呉王濞の製塩の史料などからも、塩の生産地には塩商人が存在したこと、またそこで働く労働者には各地から亡命してきた姦人も含む無頼の徒が多く存在したであろうこと、そしてそうした労働組織をとりまとめ、労働者を指揮・監督する武力を保持した任俠者が居たであろうこと、などが推測される。宣帝が任俠生活を送っていたことからすると、この蓮勺県の塩池で塩の生産に關与する任俠者と何らかのいざこざが生じて、そのために「困辱」な状態に陥つたのではないか、と考えることもあながち無理ではないのではなからうか。もしこのような推測が当たっているとすれば、後に宣帝が地節四年九月の詔勅で、天下の塩価を減ぜよ、と命じているが、そのような詔を發した宣帝の脳裏には、蓮勺県での思い出や製塩作業とその流通についてのあれこれが浮かんできて、と推測することも可能であろう。

## 2 官界と民間の任俠者との交通

『漢書』卷七六趙広漢伝に、

(広漢)京輔都尉に遷り、京兆尹に守たり。会たま昭帝崩じ、而して新豐の杜建は京兆掾と爲り、平陵の方上を護作す。建は素もと豪俠にして、賓客は姦利を爲す。広漢は之を聞き、先に風して告するも、建は改めず。是において収案して法を致す。中貴人・豪・長者の、爲に請うの至らざるは無きも、終に聴く所なし。

とあり、ちょうど宣帝が三輔を彷徨していた頃の、京兆尹一帯の豪俠が杜建であり、掾史として地方の吏を牛耳り、その配下も数多く不法行為を行っていたのである。そうした三輔地域における任俠世界の実態を知る上でもこの史料は興味深いが、すでに周知のことでもあり、ここではむしろ杜建の爲に請託を行った「中貴人・豪・長者」に注目したい。顔師古は「中貴人とは中朝に居りて貴たる者なり。豪とは豪桀なり。長者とは名徳あるの人なり」と解釈する。この解釈では、中貴人・豪・長者の三種類の人々であると顔師古が理解していることになる。中貴人については、『漢書』卷五四李広伝に、「上は中貴人をして(李)広を従え、兵もて匈奴を撃つを勸習せしむ。中貴人なる者は、数十騎を將いて従え、云々」とあるが、その注に「服虔曰わく、内臣の貴幸なる者なり」との解を引いている。実は後漢代にも、皇帝の直接の使者としての「中使」があり、李広伝の皇帝の使者となつた中貴人は「中使」と呼ばれたのではなからうか。ただ、趙広漢伝の「中貴人」の解釈を「中使」とするのは不適當であり、顔師古や服虔の解釈のように、内(中)朝において皇帝から「貴幸」された人々がこの場合の「中貴人」であろう。とする」と具体的には、昭帝崩御後も実権を握っていた霍光を中心としたグループの人々やまたあるいは宦官などであろう。

このような官僚と任俠者との関係を示す興味深いエピソードとして、『漢書』卷九「游侠萬章伝」にみえる萬章と石頭との元帝期から成帝期にかけての交際がある。萬章の伝に、

長安熾盛にして、街閭には各おの豪俠あり。(萬)章は城の西の柳市に在り、号して城西萬子夏と曰う。京兆尹門下督と爲り、従いて殿中に至る。侍中・諸侯・貴人争いて章に揖せんとし、京兆尹と言う者なし。章は遂循して甚はだ懼る。其の後、京兆は復た従えざるなり。(萬章は)中書令の石頭と相い善く、亦た頭の權力を得て、門車は常に轂を接す。成帝の初めに至り、石頭は專權擅勢に坐して官を免ぜられ、徙されて故郡に帰る。頭の貲は巨万、去るに当り、牀席器物の数百万直を留め、以て章に与えんと欲するも、章は受けず。賓客或いは其の故を問う。章は歎じて曰く、吾れ布衣を以て石君に哀せらる。石君の家破れ、以て安んずること有る能わざるなり、而るに其の財物を受くるは、此れ石氏の禍の爲に、萬氏は反って当に以て福と爲すべけんや、と。諸公は是を以て服して之を称す。

とあり、殿中において京兆尹をさしおいてその部下の萬章に争って挨拶しようとした「侍中・諸侯・貴人」は、先述の「中貴人」を理解する上でも参考になる。なお、引用史料末尾の「諸公」は、萬章の賓客や任俠者仲間のみならず、萬章と交際のあった高官をも含んだ人々を指しているだろう。

また、『漢書』卷七七孫宝伝に、成帝期のこととして、淳于長が霸陵の大俠である杜穉季と交通しており、淳于長と交友関係に入ることを希望していた孫宝が京兆尹となり、「剛直にして苟合せざる」任俠的気節ある侯文を東部督郵に礼請の上で就任させたが、その侯文から杜穉季を弾圧すべきを勧められ、大いに窮めたという話がある。<sup>(6)</sup> いま一例、王氏

の一員である紅陽侯王立も、『漢書』卷九〇尹賞伝によれば、地方の任俠者と結んで「臧匿亡命」していたように、民間の任俠的世界と深くつながっていた人物である。「臧匿亡命」ということに関連して、西漢後半期の官界における著名な任俠的官僚である朱雲の伝(『漢書』卷六十七)に、杜陵令の時に、「故縦亡命」に坐した事が記されている。朱雲は魯の人、平陵に徙ったが、「少き時、輕俠に通じ、客に借りて仇を報ず。長は八尺余、容貌は甚はだ壯、勇力を以て聞こゆ。年四十にして洒わち節を変え、博士の白子友より易を受く。又、前將軍の蕭望之に事えて論語を受け、皆な能く其の業を伝う。倜儻、大節を好む。当世は是を以て之を高しとす」という性格・経歴をもつ任俠の士である。恐らくは、若い時に交際していた任俠者との義理によって、亡命者を庇護することになったのであろう。

このように、武帝期以降においても、前稿で指摘した「諸公」の如き階層が存在し、上は宮中の貴人から高官、地方の官吏、民間では任俠的心性を有した豪傑や長者などが平常においても交通していたことは明白であろう。このような事態が前漢末まで同様に存在したことは、すでに前稿において挙げておいた、『漢書』卷九一貨殖伝にある、程鄭が淳于長や王根などの権勢者に賄賂を差し出し、その産業活動の庇護を求めている例からも証せられるであろう。

## II 前漢後半期の任俠的心性と党与の問題

### 1 問題の所在

富谷至氏はかつて、前漢後半期における公羊学の相対化と左氏学の台頭という春秋学の展開との関連で、皇帝権の変容やそれに伴う君臣関係

の変化、及び吏治（酷吏と循吏）について論じ、注目すべき見解を提出した。その中で、君臣関係の変化を、武帝期の皇帝と官僚とのパーソナルな任俠的結合関係が顕著なものから、「任俠という精神的紐帯で結ばれていた個人的なそれとは違い、より合理的、現実的な、いわば“ドライ”な関係」への変化ととらえ、そのような変化は、武帝期以降、心情重視を基本とし、任俠的行為の礼賛を惜しまない『公羊伝』の優位が次第に相対化していく中で、試験により官僚を選任するシステムが整った元帝・成帝期において左氏学が次第に台頭してきたことと深く関係づけられる、と指摘した。また、君臣関係の変化の要因を、皇帝権の名目化・弱体化、君臣間の結合紐帯の喪失、官僚任用の方法の三つに求めるが、特に結合紐帯の喪失に関する説明では、「西漢末にかけての游俠の氣風の衰退である」と端的に指摘し、「任俠の氣風の衰退した下で、任俠精神は官僚の内面でも希薄となり、任俠という紐帯で結ばれていた結合が弛緩するのも当然であろう。任俠精神の衰退の原因は、多岐にわたり求められるが、武帝期の儒学官学化が西漢後半期にはば確立し、礼教主義的色彩が強くなったことがその大きな要素となっている」と論じている。この富谷氏の任俠的精神の衰退という見解は、宮崎市定氏や大室幹雄氏にも共通するものであり、『漢書』游俠伝を閲するとき、班固の主観的な理解に因るところも考慮に入れるべきではあるが、そのような感を抱くことは否定できないのである。

ところで、増淵龍夫氏は、その著『中国古代の社会と国家』（以下では岩波書店の一九九六年の新版による）の第二編第二章「漢代における国家秩序の構造と官僚」の第四節「武帝以降の官僚制における党派の発生―内朝と外朝」において、ほぼ以下のように論じている。武帝期における天子の官僚に対する一方的権力関係は、内朝と外朝の政治機構の分

離により、次第に崩れ始める。天子の一方的権力体系であるべき官僚組織は、天子には直接結びつかず、「ここに『天子孤立して、官僚党をなす』傾向が漸くいちじるしくなってくる。『党』『党友』『党親』という語が漢書において宣・元帝以後の記載から顕著にめだってくるのは、このような傾向を示すものである。そしてこのような政治情勢の変化のもとにおいて、あの養客結客の任俠の習俗は、官僚相互間において、所謂党友形成に大きな役割を演じ、武帝以前とは異なった形で、国家権力の一元的支配体系をみだす作用を受け持つことになる」（二九一―二九二頁）と述べ、党友結成の具体的史料を列挙し、「武帝以来官吏登用の常道として制度化された、孝廉・茂才・賢良方正等の選挙の制も、この官僚間に根強い養客結客の任俠の習俗と結びついて、公卿列侯の党翼をひろめるに役立ちはじめた」と言っている。増淵氏の問題関心は、言うまでもなく次の言葉に示されている。「漢代における官僚組織は、制度的関連としては、あくまで唯一の専制権力者としての天子の一方的支配の体系である。しかし官僚組織のそのような制度的体系は、現実においては、必ずしも制度の意図するそのままの形で自動的に動くのではない。実際に官僚組織をその現実の姿において動かしている他方のバネは、官僚自体の生活感情や生活習俗のなかにもひそんでいるのであって、この二つの要因の複雑な相互作用のなから、天子と官僚との実質的關係、官僚組織の現実の動きが規定されてくるのであり、またそこに国家権力の一つの限界も示されてくるのである」と。

以上、富谷、増淵両氏の見解を紹介した。両氏の見解の相違をもふまえながら、考えらるべき問題をどのように定立すればよいであろうか。

第一に、増淵氏は、天子の官僚に対する一方的権力関係を内面から支えるのが任俠的習俗による人的結合関係だと考えていることは言うまで

もない。その意味では、増淵・富谷両氏の武帝期までの君臣関係に対する理解にはそれほど相違はない。問題は、武帝期以降のそれである。富谷氏は、任侠的な個人的結合から合理的でドライな関係への変化、と捉えているが、増淵氏は、君臣関係を第一義とはせず、任侠的習俗からくる生活感情が大きく作用しているところの官僚相互間の党与の結合関係が肥大し、それが結果的に君臣関係の弛緩や皇帝権力の相対的弱化をもたらしていると考えているようである。官僚の内面にひそむ任侠的生活感情が実際に希薄化しているのかどうか、官僚層の生活感情が西漢前期と比べて変容しているのかどうか、という事を確かめる必要がある。

第二に、増淵氏は、官吏任用制度も、養客結客の任侠的習俗によってその運用が党与によって利用された面のあることを見落としてはいない。富谷氏は、前漢後半期の儒学官学化の下での官吏任用制度が任侠的精神の衰退の要因となっているように理解している。こうした理解の食い違いを整合的にするためにも、前漢代における選挙制度の運用に任侠的人的結合関係がどのように作用していたかについて、それぞれの時期の政治や社会の状況に即しつつ、その実態を明らかにすることが求められる。この課題には、前稿で示唆した武帝期の孝廉選挙制度創始にからむ諸公グループの選挙介入の問題も含まれるであろう。

第三に、富谷氏の考察には触れられていないが、増淵氏が、朱博の例によって、「その任侠の気風をもって士大夫の間に大きな勢力をきづいていった」とし、他の箇所でも、「(石頭は)中書僕射牢梁・少府五鹿充宗・御史中丞伊嘉と『党友を結び』、尚書を支配して内朝における政権を独占する。すでに官職の体系はその本来の機能を失い、中央・地方の官僚はこれと結び、或はこれに反抗するいくつかの党にわかれて相争う」と記述した、そうした「党与」結合の中央・地方における実態(豪族や豪

俠などの地方有力者の動態なども含む)を更に明らかにすることが課題として挙げられる。その際、前漢後半期の官界における官僚間の結合関係が、果たして任侠的生活感情によるものであるのかどうか、をも確かめる必要がある。そしてこのような検討の後に、前漢後半期における皇帝と官僚との君臣関係が、前漢前半期の武帝期までのそれと異なった様相を呈するようになるのか否か、さらにそれによって漢代皇帝権のあり方がどのように変容していったか、という大きな課題に迫っていくことが求められよう。このことは、後漢代に入って顕著となる門生故吏関係に含まれる、中央や地方官府における府主と属吏との「君臣」関係の展開との関連をも課題として提起することになる。

ただ上記の諸問題には漢代の社会と政治を考える上で複雑且つ重大な問題をも含んでおり、小論の能くする所ではない。当面の問題関心としては、前漢後半期において、従来言われているような任侠的心性の衰退が実際起きていたのかどうか、に在ることをお断りしておく。

## 2 党与結合について

まず、『漢書』巻五九張湯伝に、

武安侯は丞相と爲り、(張)湯を徴して史と爲す。薦めて侍御史に補し、陳皇后巫蠱の獄を治めしむ。深く党与を竟めれば、上は以て能と爲す。

とあり、また『漢書』巻六八霍光伝に、

後に(上官)桀の党与の(霍)光を誣する者有り。上は輒ち怒りて曰く、大將軍は忠臣にして、先帝の以て朕が身を輔するを属せし所、敢て毀つ者有れば之を坐せしめん、と。是より桀等は敢て復た言わず。とあって、これらからすると、「党与」というのは、官僚間の私的な結

合関係であることはいうまでもなく明白である。それでは何故に党与が生まれるのか。以下では、宣帝以降に存在した党与を、時期を区分しながら列挙し、若干の考察を加える。

【宣帝期】（丸カッコ内のは各人の列伝の『漢書』の巻数）

○楊惲（六六）・韋玄成（七三）・蓋寬饒（七七）・韓延寿（七六）・蕭望之（七八）・于定国（七二）・張敞（七六）の官界における一大党友が存在した。

【元帝期】

○この期間の初期には、王章（七六）・陳咸（六六）・朱雲（六七）と石頭（九三）・牢梁・五鹿充宗・陳順・伊嘉の党与〔石頭伝〕が対立していた。

○石頭・弘恭と蕭望之・周堪（八八）・劉更生の党与間の対立が見られる〔蕭望之伝〕。

なお、朱雲伝によれば、朱雲は蕭望之から論語を受けているから、両者は師弟関係となる。

【成帝期・哀帝期】

○孫宝（七七）・淳于長（九三）・蕭育（七八）と紅陽侯王立との対立。

○成帝末期から哀帝期にかけての一大党与として、朱博（八三）・陳咸（八六）・孫宏のそれがあり、それに紅陽侯王立が加わったグループと翟方進（八四）との対立。

○蕭育伝によれば、朱博・陳咸と蕭育・淳于長のグループの結合が見られ、また、朱博伝によれば、朱博と紅陽侯王立との間に結合関係があり、王立が有罪となったために、朱博は免官されている。

以上の例以外にも、王莽期のこととして、『漢書』卷八六何武伝に、

武は前將軍と爲る。素もと左將軍公孫祿と相い善し。是に於て武は公孫祿を挙げて大司馬たるを可とし、而して祿も亦た武を挙ぐ。太后竟に自ら（王）莽を用て大司馬と爲す。莽は有司に風して、武・公孫祿は互いに相い称挙す、と劾奏せしめ、皆な免ぜられ、武は国に就く。……元始三年、呂寬等の事起こる。時の大司空甄豐は莽の風指を受け、使者を遣わし伝に乗りて党与を案治せしむ。連引して諸もろの誅さんとする所は、上党の鮑宣、南陽の彭偉・杜公子。郡国の豪桀の坐して死する者は数百人。武も誣せられし中に在り。大理正は檻車もて武を徴す。武は自殺す。衆人の武を冤とする者多し。

とあり、この場合には冤罪の可能性があるが、党与が中央官界のみならず、地方勢力とも結んでいたことをうかがわせる。なお、何武は翟方進とも「交志相友」の仲であったことが何武伝に見える。

前漢後半期における党与結合を概観すると、官界における主導権争いや、官職への相互推薦、官界出仕への願望などをその主たる要因とする人的結合関係であるように見える。交友関係も絶対的なものではなく、例えば、蕭育伝にあるように、蕭育と朱博は若い頃からの交友関係にあったが、後に二人には隙が生じ、「故に世は交を以て難しと爲す」とされている。また、紅陽侯王立は、一旦は淳于長と対立していたが、その後蕭育を媒介にして淳于長とも関係があった朱博とも「相善」の仲になったりしているのである（朱博伝）。このようにそれぞれの政局の状況によって党与結合が変化することは政治の世界では常であるとはいえ、任俠的信義の希薄な結合とも受け取られるケースも存在する。

党与結合に参加する人士にとってのメリットは、官職への相互推薦にあったと思われる。例えば、『漢書』卷六〇杜欽伝の子の業の伝に成帝末期の事として、

(杜) 業は材能あり、列侯を以て選ばれて復た太常と爲り、数しば得失を言い、權貴に事えず。丞相の翟方進・衛尉の定陵侯淳于長と平らかならず。：上書して言えらく、方進は本もと(淳于) 長と深く結んで厚し、更ごも相い称薦せり。：紅陽侯立は子の(淳于) 長の貨賂を受けしに坐し、故に国に就くのみ。大逆に非ざる也。而るに方進は復た(その) 党友の後將軍朱博・鉅鹿太守孫宏・故の少府陳咸を奏し、皆な免官せしめ、(陳) 咸を故郡に帰らしむ。刑罰の平らかならざるは、方進の筆端に在り、衆庶は疑惑せざるなし。

とある。また、『漢書』卷九十三石顯伝に、

(石) 顯は中書僕射の牢梁・少府の五鹿充宗と結んで党友と爲り、諸もろの附倚する者は皆な寵位を得たり。民之を歌いて曰く、牢邪石邪、五鹿客邪、印何累累、綬若若邪。其の官を兼ね執に據るを言うなり。

とあり、『漢書』卷八十三朱博伝には、

郡守・九卿と爲り、賓客は門に滿つ。仕官せんとする者は之を薦挙し、仇怨に報ぜんとする者には、劍を解いて以て之に帶せしむ。其の事に趨むき士を待することは是の如し。

とある。これらの例からも党与結合関係者間には相互推薦の常態であったことがわかるのである。

このような党与結合や党与間の対立にそれぞれの時期の官界は揺れ動いたのであるが、かかる風潮に同調しない官僚も存在したことは言うまでもない。『漢書』卷八一孔光伝に、

光は帝の師傅の子にして、少くして經行を以て自ら著われ、官を進むこと蚤かに成るも、党友と結び遊説を養わず。

とあるのが注目される。『漢書』卷八十三の薛宣伝に、「(薛) 宣には私党・

遊説の助なし」なる文言が見られる。この「遊説」とはどのようなことを謂うのであろうか。

『漢書』卷四五息夫躬伝に「党友の謀議し相い連なりて獄に下る者は百余人」とあり、顔師古は「親党及朋友」と注するが、息夫躬の党友の中心は、哀帝皇后の父の傳晏と、長安出身の遊説家である孫寵である。その三人の結合について次のように『漢書』は記している。

哀帝初めて即位す。皇后の父、特進孔郷侯傳晏、躬と同郡にして、相い友善たり。躬は是に繇り以て援と爲し、交游日に広し。是より先、長安の孫寵、亦た遊説を以て名を顯す。汝南太守を免ぜられ、躬と相い結ぶ。俱に上書し、召されて待詔たり。

息夫躬と孫寵の兩人は東平王を誣告して光禄大夫と南陽太守のポストを獲得するが、この時二人に荷担したのが、中郎の右師譚と中常侍の宋弘であった。恐らく「遊説家」であった孫寵の活躍によるものであろう。遊説とは、自らの政治的理念や願望、または党派の主張を広く報知して共感を得る役割を果たすことであり、政治的成功を獲得したいと願う官僚や党与にとって遊説に任ずる人材を確保することが必要とされたのである。

さて、息夫躬伝に戻ると、当時哀帝の寵愛をほしきままにしていた董賢を陥れるため傳晏と謀議して、傳晏を大司馬衛將軍とするように画策するが、董賢によって逆襲を受け、結局息夫躬・孫寵ともに免官されることになる(その詳細は『漢書』卷八十六王嘉伝に見える)。この哀帝期における「党友」事件は、任侠的結合関係によるものと見なす事には無理があるのではなからうか。息夫躬のグループの行動は、東平王の誣告にも示されるように、官界におけるそれぞれの地位の保持や昇進を願望としての所作であることは明白であり、当時の「党与」「党友」「党親」と



称される結合関係には、このような利害関係に根ざした政治活動の結果である場合も多々あるのである。とはいっても、翟方進伝に見える「背公死党之信」に基づく「相友善」、「厚」、「善」等々の、党与結合を構成する個々の人的結合を示す表現には、任俠的心情が全く含まれていなかったとは言えず、実際にこうした党与活動を行った官僚の中には朱博のとき任俠の士も存在したのであって、実態は複雑である。

こうした問題を考える場合には、そもそも「任俠的結合」とは一体どのような心性によって生成・維持されるものであるか、がまず確定されなければならないであろう。それによって前漢後半期の党与活動という政治上の顕著な事項の歴史的意味が測られるからである。任俠的精神の衰退云々も、任俠的精神の何たるかを確定した上で始めて可能となるのではないか。任俠的精神や任俠の心性について言えば、そこには、正義・道理への共感や窮迫者への同情、あるいは恩を受けた者に対する報恩の義務感などによって発動される何らかの自損の行為をもっともしい覚悟を含んだ心情が存在していなければならない。単なる交友関係や利害を同じくする者同士の互惠関係は、任俠の心性によるものとは必ずしもいえない。少なくとも筆者はそのように「任俠の心性」を考える者である。任俠の士として先に挙げた朱博の、友人の陳咸を死罪から救出すべく、困難をみずから引き受けて敢行するといった行動を支える心情こそが、「任俠の心性」なのである。このような前提をおいて、前漢後半期の政治過程に現れる党与活動の任俠性を測定すると、すべての党与結合が任俠の心性によって貫かれているとは一概には言えないのである。それでは、前漢後半期における官界では任俠的精神が次第に衰退していったと言いうるのであるか。否である。以下において何人かの人士の行動などをかいま見ることによって、前漢後半期の官僚の中に発現し

た新たな「任俠の心性」を考察してみたい。

### III 前漢後半期の官僚的任俠性の展開

増淵氏の、「あの養客結客の任俠の習俗は、官僚相互間において、所謂党友形成に大きな役割を演じ、武帝以前とは異なった形で、国家権力の一元的支配体系をみだす作用を受け持ってくることになる」という指摘は、上述の党与結合の実際を見るとき、肯定せざるを得ない側面を有している。例えば、『漢書』卷八十六楊敞伝の子の楊惲の条に、

(楊)惲の兄の子の安平侯譚は典属国たり、惲に謂いて曰く、西河太守の建平杜侯は前に罪過を以て出され、今は徴されて御史大夫と爲る。侯の罪は薄ければ、又た功有れば且つ復た用いられん。惲曰く、功有るも何の益あらん、県官は爲に尽力するに足らず、と。惲は素もと蓋寛饒・韓延壽と善し。譚即ち曰く、県官は実に然り。蓋司隸・韓馮翊は皆な尽力の吏なるも、俱に事に坐し誅せらる、と。

とあり、ここにはもはや、県官(皇帝)に対する忠誠心は見られない。

また、『漢書』卷八十四翟方進伝に、

案ずるに、後將軍朱博、鉅鹿太守孫闓、故の光祿大夫陳咸は(王)立と交通し厚善たり。相い与に腹心と爲り、公に背き党に死するの信あり。

とあり、「公」(漢家の支配体制・その統帥者としての皇帝)に背を向け、自らの党与のために死力を尽くすような心情が横溢していることを翟方進は嘆いているのである。『漢書』游侠伝の序文に「是において公に背き党に死するの議成り、職を守り上を奉ずるの義廢る」とあるように、戦国時代の四公子を賞賛する風潮に対して、班固も批判的である。しか

し翟方進自身が自らも党与を組み、対立する党与をこのような言葉で抹殺しようとしているところに、党与結合のもたらす官界の深刻さがかがわれよう。王莽があれば党与結合を憎んだのは、おのれの権力基盤を崩す可能性を党与結合が有していることをよくよく承知していたからに他ならない。

しかしながら、前漢後半期において、官僚がすべて漢家や皇帝に背を向けていたかといえ、もとよりそうではない。『漢書』卷七七諸葛豊伝に、元帝期における官界の情況、官僚の行動に対する同時代の官僚の批判的認識として、諸葛豊の言辭が載せられている。曰く、

夫れ布衣の士をもってして尚お猶お刎頸の交際有るがごとし。今、四海の大を以てするも、曾て節に伏し誼に死するの臣なし。率むねは尽く苟合して容を取り、党に阿して相い爲めにし、私門の利を念い、国家の政を忘る。邪穢濁溷の氣、上は天を感ぜしむ。是を以て災變は数しば見われ、百姓は困乏す。此れ臣下忠ならざるの効なり。臣は誠に之を恥じて已む亡し。凡そ人情は安存を欲して危亡を惡まざるは莫し。然れども忠臣直士の患害を避けざる者は、誠に君の爲なり。

と。まことに直言の士の言辭であろう。諸葛豊と同じ伝に列せられている宣帝期の、「剛直高節」と称される蓋寛饒（『漢書』卷七七）の行動もほぼ同様であり、兩人は共通して歴とした儒学の士である。諸葛豊の言にもある、害を避けず君のためにする行為は、任俠的心性から多く生じるとすることも可能であろう。

先述した朱雲は、西漢後半期において朱博と並ぶ代表的な任俠的官僚であろう。朱雲自身の性向は任俠的心性の粗暴な一面をよく表しているが、その官僚としての行動に現れた任俠性は、死をも恐れぬ「諫言」の敢行である。武帝期の汲黯に類似した側面を有している。朱雲の伝を一

読して興味深いのは、任俠的性向を顕著に示しながらも、儒学を修得して博士にまで至っているという、任俠的心性と儒家的教養とが接合して一種独特な人格を形づくっているという点である。この朱雲の人格は、前漢後半期における官僚の任俠的心性のあり方を突出して表わしているものではなからうか。朱雲自身の漢家や皇帝に対する忠誠心に若干の疑念なきにしもあらずの感を抱くけれども、成帝の張禹に対する過剰な寵愛や、『漢書』卷八一張禹伝に示される張禹の蓄財や奢侈に対するその激烈な諫言の敢行は、やはり任俠の士たる所以であろう。任俠的心性が官僚としての行動に表れる一つの指標は、やはり死を賭しての諫言である。このような諫言を敢行した人士として、他にも『漢書』卷七六韓延壽伝に、延壽の父の韓義が「義は（燕王を）諫めて死し、燕人は之を閔む」とあり、文学を以て対策に応じた魏相によって「（韓義は）比干の親なきも而るに比干の節を踏む」とされ、その行為が「人臣たるの義を明らかにする」ものであると賞賛され、その子の韓延壽が報賞されているのである。また、『漢書』卷七六王章伝に、その人となりとして「朝廷に在りては、敢えて直言するに名あり」とある。王章は、すでに触れたように、元帝期には御史中丞の陳咸と結んで石頭と対立し、一旦は石頭に陥れられて免官されたけれども、成帝期に入って京兆尹となり、時の大將軍王鳳の専権を非として親附しなかったため、『漢書』卷六七梅福伝によれば、「王章は素より忠直にして（王）鳳を譏刺すれば、鳳の誅する所と爲る」とある。ここには任俠的心性による専権者に対する批判的態度、つまり漢家や皇帝への「忠直」な性格が示されているのである。

しかしながら、このような極諫をも敢えてする任俠性とはやや異なる節義の官僚が存在する。『漢書』卷七二兩龔伝に、

兩龔は皆な楚の人なり。勝は字は君賓、舎は字は君倩、二人は相い

友し、並びに名節に著なり。故に世は之を楚の兩龔と謂う。…(王)莽すでに国を篡い、五威将帥を遣わして天下の風俗を行せしむ。将帥は親から羊酒を奉じて(龔)勝を存問す。明年、莽は使者を遣わし即きて(龔)勝を拜して講学祭酒と爲す。勝は疾と称して徴に応ぜず。…使者は五日に壹たび太守と俱に起居を問ひ、勝の兩子及び門人高暉らの爲に言えらくは、朝廷は虚心にて君を待するに茅土の封を以てす、疾病と雖も宜しく動移して伝舎に至り、行くの意あらんことを示すべし、必ずや子孫の爲に大業を遺さん、と。(高)暉ら使者の語を白す。勝は聴されざるを自ら知り、即ち暉等に謂えらく、吾れ漢家の厚恩を受くるも、以て報ずるなし。今は年老いたり、日暮地に入らん。誼として豈に一身を以て二姓に事え、下りて故主に見えんや。勝は勅に因り棺斂喪事を以てするも、衣は身を周り、棺は衣を周るのみにて、俗に随いて吾が冢を動かし、柏を種えて祠堂を作る勿れ、と。語り畢わり、遂に復た口を開き、飲食せず。積もること十四日にして死す。とある。ここで龔勝は、「漢家厚恩」を受けた自分が王莽に仕えることを拒否することは、漢家の厚恩に対するせめてもの報恩になると判断していたのであろう。それは「誼(義)」なのであり、その「誼」を実践するためには自ら死を選ぶ他はなかったのである。ここで注意すべきは、龔勝は名節の士であったと評価されていたことである。名節と任俠の士との関係について言えば、『漢書』卷九「游俠樓護伝に樓護の人柄として、「人となりは短小にして精辯、論議は常に名節に依り、之を聞く者は皆な竦たり」とあり、樓護の任俠的行爲と合わせて考えてみれば、前漢末期における官僚の任俠性が節義行爲と結合されてきていることがうかがわれるのである。樓護の伝に

初め護に故人の呂公なるあり。子無く護に帰す。護は身ずから呂公

と、妻は呂嫗と食を同じくす。護の家居するに及び、妻子は頗る呂公を厭えり。護は之を聞き、流涕して其の妻子を責めて曰く、呂公は故旧にして窮老するを以て、身を我に託せり。義の当に奉ずべき所なり、と。遂に呂公を養ふこと終身。

とある。この樓護の心情と行爲はまさしく「任俠的心性」に基づくものである。管見の限りでは、『漢書』に見える「名節」の語はこの二例のみである。名節についてはかつて論じたことがあり、「名に對する節」との解釈を示した。龔勝の場合には、人臣としての名を有する龔勝が人臣としての節を全うしたことになり、樓護の場合には、故旧としての名に對した節を遂行したことになろう。そうした名節行爲の背後に「義」の觀念が付随して在ることは、上記二史料から明らかであろう。

龔勝の如き人士は例外的ではなく、『漢書』卷七二の卷末に、「廉直を以て名を爲」した郭欽や蔣詡をはじめとした、官を去って王莽に仕えなかった人士が列挙されている。また『後漢書』列伝七一の独行伝にも、譙玄や李業の如き死を覚悟で王莽や公孫述の召命を拒否した人士が列せられている。更に留意すべき事として、『漢書』卷六七に列せられた二云敵の伝に、

平陵の人なり。同県の呉章に師事す。…(王)莽の長子の宇、莽の衛氏を隔絶すれば、帝の長大なる後に怨まれんことを恐る。宇は呉章と謀り、夜に血を以て莽の門に塗り、鬼神の戒の若くし、以て莽を懼れさせんことを冀う。章は因りて其の咎を對さんと欲す。事は発覺し、莽は宇を殺し、衛氏を誅滅せり。謀の連及する所の死者は百余人。章は坐して要斬、尸を東市の門に磔せらる。初め(呉)章は当世の名儒たり。教授尤も盛んにして、弟子は千余人。(王)莽は以爲らく、悪人の党は皆な禁固し、仕官するを得ざらしむべし、と。(呉章の)門

人は尽く名を他師に更う。(二五) 敵は時に大司徒掾たり。自ら呉章の弟子と効し、章の尸を収抱して帰り、棺斂して之を葬す。京師は焉を称す。

とあり、後漢時代に盛行する門生故吏関係による義行がすでに前漢末の一人士によって実践されてもいるのである。言うまでもなく、上記の諸人士はすべて儒学を学んだ知識人官僚である、という点に特に注意すべきであろう。

これまでの考察をふまえ、前漢後半期における任俠的心性のあり方についての整理と展望を示しておきたい。

党与の結合関係は、任俠的心性に因るものとは一概に言えず、官界における自己の権力保持や保身の必要性から、党与を求めているに過ぎない場合もある。とは言っても、党与結合関係の中に在った官僚の中には、任俠的心性を有した人士も数多く存在したことは、これまでの挙例からも明らかであろう。その意味では、富谷氏の、官界における任俠的精神の衰退、という理解に同意することはできない。ただ、増淵氏も指摘したように、前漢後半期の党与結合という任俠的結合関係は主として官僚間の個人と個人の間に盛行的、武帝期までとは異なって、皇帝権力の一元的支配体制を乱す大きな要因として存在しているように見える。しかしながら、龔勝の場合で見たように、名節觀念による新たな君臣関係意識が生まれており、それは、「漢家厚恩」に対する報恩という形で表現されるものであり、まさしく任俠的心性による忠誠心であろう。前漢末期から後漢代にかけての官僚の行動や言辞に示される「漢家厚恩」への報恩の義務感、皇帝と官僚とのパーソナルな結合関係のみによるものではなく、漢の王朝（漢家）に対する忠誠心として理解することが

できないか。敢えて言えば、前漢代後半期において次第に、皇帝による統治は伝統として定着し、国政機関の長としての皇帝の有する尊厳性が確立し、臣民に対して恩恵を与える主体としての皇帝像が広まってきたのではないか。とするならば、戦国以来のパーソナルな人的結合関係を支える任俠的生活感情が、漢代の儒家思想による影響を受けて再構成され、国政機関の長としての皇帝に対する官僚層の忠節觀念、という新たな君臣関係意識へと編み変えられていった、という理解も可能になるだろう。さらに、この新たな君臣関係意識が、後漢代に入ると、中央の官府や地方の郡県府廷の長官に対する掾史層の「君臣」関係意識をも発生させたのではなからうか。

要するに、ここで申し述べておきたいのは、戦国以来の任俠的心性が前漢代を通じて儒学の影響を受けつつ、前漢後半期の官界において、官僚の内面に新たな名節觀念を生み出して昇華され、一方民間においては任俠的生活感情がそのまま個々人の日常生活の内部に温存されたり、或いは大室氏の言う暗黒部へ潜流していったと考えられないか、ということである。任俠的心性の官僚世界と日常的生活世界への分岐、及びその心性と行動の両様化が前漢末に顕現したのではないか、という仮説でもって、後漢から三国時代における任俠的心性の展開を考えてみることに、これが残された一課題となるように思われる。

# 【注】

- (1) 宇都宮清吉『漢代社会経済史研究』（弘文堂 一九五五年）の四四〇頁に「富人」への言及がある。また、山田勝芳「中国古代の商人と市籍」（『加賀博士退官記念中国文史哲論集』所収 一九七九年）に、「富人」の諸形

態についての解説がある。

- (2) 「市」の研究については、堀敏一『中国古代の家と集落』（汲古書院 一九九六年）の第四章「中国古代の『市』」を参照。

- (3) 『唐会要』卷八八塩鉄使の条に、「鹵池在京兆府奉先県」、「太和二年三月、度支奏、京兆府奉先県界鹵池側近百姓、取水柏柴燒灰煎塩、每石灰得一二斤塩。乱法甚於鹹土、請行禁絶。今後犯者、據灰計塩、一如鹵池塩法条例科断。従之。」とある。顔師古は「宣帝紀」注で鹵池は「今在櫟陽県東」と言っているから、唐代の奉先県よりは南、下邳県の近辺であった可能性もあるが、このあたり一帯には鹵池が点在しているから、漢代の蓮勺県の鹵池についても、上記の『唐会要』の事態があり得たのではないか。なお、『太平實字記』卷二八関西道四の同州蒲城県の条に、「五味陂、漢書宣帝紀常困於蓮勺鹵中。如淳曰、爲人所困辱也。蓮勺県有塩池、縱廣十余里、其郷人名曰鹵中。服虔曰、鹵中或曰澤中。孟康曰、蓮勺県西北也。按漢蓮勺県在京東南下邳県界、此即鹵中也」とあり、『水経注』卷十九渭水注には、「蓮勺城南、又東注金氏陂」とあり、この金氏陂は『太平實字記』の五味陂と何らかの関係のあるものであろう。また『太平實字記』同上条に、「後漢書云」として、重泉令王阜の豪俠彈圧に関する記述があるが、『後漢書』を検索しても見当たらない。王阜については、『太平御覧』卷一に「王阜老子聖母碑」が残されており、さらに『後漢書』西南夷伝の填王の条、及び『東觀漢記』や『華陽国志』にも記述があるが、『太平實字記』のごとき内容のものではない。製塩との関係で言えば、『後漢書』列伝十八馮衍伝附田邑伝条の李賢注に引く『東觀漢記』では、田邑は馮翊蓮勺の人であり、その祖先は齊の諸田で、父の田豊は王莽の著威將軍となったことが記されている。また、『後漢書』列伝三二第五倫伝に、「第五倫字伯魚、京兆長陵人也。其先齊諸田。諸田徙園陵者多、故以次第爲氏。…(倫)自以爲久宦不達、遂將家屬客河東。變名姓、自称王伯齊、載塩往來太原・上党、所過遇爲糞除而去。陌上号爲道士」とあり、後、京兆尹府の主簿に任ぜられ、「時長安鑄錢多姦巧、逕署(第五)倫爲督鑄、領長安市。倫平銓衡、正斗斛、市無阿枉、百姓悅服」とある。第五倫の塩商人としての活動は、河東の製塩地に基づいたものであるが、三輔に移徙された齊の諸田の中にはこのような商業によって身を立てる者も多く存在し、蓮勺県に徙された齊の諸田一族が製塩や塩の販売に従事していたことも大いにあり得ることはなからうか。

- (4) 長者については、上田早苗「漢初における長者―『史記』にあらわれた理想的人間像―」(『史林』五五卷三号 一九七二年)を参照。

- (5) 後漢代の中使については、拙著『後漢時代の政治と社会』(名古屋大学出版会 一九九五年)二四五頁注(9)に、史料を挙げて、「中使に任ぜられるのは、皇帝のまったく私的なとりまきの人々が多かった」ことを指摘しておいた。なお、『後漢書』列伝二六張玄伝に、「聞中貴人公卿以下、当出、祖道於平樂觀」とあり、前後の叙述からすると、「中貴人」には「黄門・常侍」(中官)が含まれていたことは確かであろう。

- (6) 原文は左の通り。

(侯) 文求受署爲掾、進見如賓礼。数月以立秋日署文東部督郵、入見、勅曰、今日鷹隼始擊、当順天氣取姦惡、以成嚴霜之誅、掾部渠有其人乎。文仰曰、無其人不欲受職。宝曰、誰也。文曰、霸陵杜穉季。宝曰、其次。文曰、豺狼横道、不宜復問狐狸。宝默然。穉季者大俠、与衛尉淳于長・大鴻臚蕭育等皆厚善。宝前失車騎將軍、与紅陽侯有隙。自恐見危。時淳于長方貴幸友宝、宝亦欲附之。始視事而(淳于)長以穉季託宝、故宝窮、無以復応文。…穉季子杜蒼字君敖、名出穉季右、在游侠中。

杜穉季の子の杜蒼については、父と同様に権貴と結合していたことは推測に難くないが、『漢書』にその証を検出できなかった。

- (7) 富谷至「西漢後半期の政治と春秋学」(『東洋史研究』三六卷四号 一九七八年)

- (8) 宮崎市定「游侠に就て」(『歴史と地理』第三四卷四・五号 一九三四年)

同氏著『アジア史研究 第一』所収)で、宮崎氏は、「(中央の権力は)游侠の社交界をして、中央宮廷の社交界の支部たるの地位を与え、彼らの存在を承認しつつ中央の威力を認めしむればよい。此処に両者の妥協は成立した。游侠と中央との握手はやがて徐々に游侠の貴族化となって現れた。之と共に不羈独立の游侠の気概が消滅したのも亦止むを得ない。見よ史記の游侠伝は如何に精彩に富める文字なるかを。而して漢書に至っては狗尾を続ぐもの、班固が書き足したる游侠は、次第に貴族化し、去勢されたる游侠である」と述べ、游侠の貴族化は前漢初期にすでに始まっていたが、半ば以降に盛んとなった、としている。

また、大室幹雄氏は、『劇場都市—中国古代の世界像—』(三省堂 一九八一年)の第十章「游侠と倡優」において次のように游侠の歴史を時期区分している。以下そのまま引用する。

(一)古典期—春秋末期から戦国末期まで、知識人・交易商人と共存し、ときに混合しあった時期で、のちのちまで社会の周辺や底辺に生きる人々に游侠的生活様式の二原型を提供した。

(二)活動期—秦末から漢初まで、活動期と称する所以は前述。

(三)変質期—武帝期、本来の知識人が学者—官人に変形したように、游侠もいっぽうで中心の権力に取込まれて「酷吏」に、たほうで閭里郷曲の周辺で危険分子の位置に定着した。

(四)衰退期—成帝期、皇帝自身による気紛れで奇妙な結合の試みはあったが、それに先だつ宣帝の弾圧によって游侠はいよいよ周辺化し、暗黒化した。中央権力の衰頹は地方に二次的権力としての土豪勢力を強化し、游侠はそれに吸収され、その結果土豪勢力が部分的に游侠化して「豪猾」になり、中心でも外戚王氏一族を筆頭とする顯門勢家が豪猾化、つまり間接的游侠化を示すいっぽうで、逃亡して匪賊化した農民や都市細民の「群盗」や悪少年と結合して游侠は周辺部に暗黒化を進めた。

(9) 『漢書』卷九八元后伝に見える、王莽から伝国璽を要求された元后が罵つ

て言った言葉の中に、「蒙漢家力」とか、「我漢家老寡婦」なる文言がある。また、『漢書』卷九七外戚伝の平帝王皇后伝に見える、王莽の女である平帝の王皇后が、燃えさかる未央宮に身を投じる際に発した言葉「何面目以見漢家」も留意される。「漢家」については、尾形勇『中国古代の「家」と国家』(岩波書店 一九七九年)を参照。

(10) 『漢書』卷六九辛慶忌伝によると、辛慶忌が何故にあれほどまでにして朱雲をかばったのが、ある程度理解されてくる。というのは、辛慶忌自身が任侠的傾向を有しているからである。その伝には、「質行正直、仁勇得衆」とあり、もともと辺境で防衛に従事していた武人であるから、部下との結合関係によって任侠的傾向が醸成されていたのであろう。又、辛慶忌自身の任侠的性格は、父親の辛武賢以来の辛家の家風から来るかもしれない。辛武賢と趙充国とは仲が悪く、趙の家の者が辛氏の者を殺害したことがある。その後、辛慶忌の子が趙氏を殺害したことに困って、辛慶忌が執金吾から酒泉太守に左遷されているが、これは任侠的心情による復讐であらう。さらに、王莽の時期に至り、辛慶忌の長男の辛通の長子が、平帝の外戚(従舅)の衛子伯と「相善」の仲であり、「兩人俱游侠、賓客甚盛」であったと記されている。このように見てくると、辛慶忌の家(昌陵に居住)には、任侠的人士が出入りしており、その中に朱雲も含まれていた可能性がある。朱雲が布衣の身で成帝の面前で極諫を行ったのには、もと博士であったことも関わっていたであらうが、或いは辛慶忌の推薦があったためではないか、という疑いがもたれる。

(11) 拙稿「東漢名節考」(『古代文化』四二卷三号 一九九〇年)参照。